

天使のつぶやき



ある時 天使はつぶやきました。



「僕はどうしてここにいらんだらう？」

「君がそうしたいと望んだからだよ」神様は答えました。



「そうなの？いつからココだ？」

「ずっと前から…でもついさっきだよ」

「どこだよ？」

「そう…ココには時はないからね…。」

「それまではどこに居たの？」

「もうひとつの世界だよ。」

「もうひとつの世界？」



「そう、こことは異なつた世界だよ。」

「へえ…どんな？」

「欲びと悲しみ、慈しみと憎しみ…それと愛とが混在していて
いろいろな体験ができるところだよ。」

「何だか大変そうなところだね…。」

「私も君もさっきまでそこにいたんだよ。何度もね…」

「どうして？」

「楽しいからだよ。」

それぞれに異なった姿と環境でいろんな体験をしたんだよ。

男であったり、女であったり、

父になったり、母になったり、

時には

英雄になったり、愚か者になったり…。」

「英雄はいいけど…愚か者は嫌だなあ…」

「嫌なら違う選択をすればいいんだよ。」

変更はいつでも何度でもできるから…」

「変えられるの？」



「もちろん、その都度 自分の好きな道を選べばいい。
初めの目的とは違う体験を選ぶ者はいっぱいいるよ。」



「ちょっとおもしろそうだなあ...」

「また行ってみるかい？」

「うーん…イヤになつたらすぐに戻つてきてもいいんでしょ？」

「いいけど…それはあんまりオススメできないなあ…」

「どうして？」

「せつかく行つたのにモッタイナイし…
それに…」

「それに？」

「出迎えてくれた人たちが悲しむよ…」



「……………」

「嫌にならない計画を立ててみたらどうかかな？
今度は何を体験してみたい？」

「…わかんない。

今までどんな体験してきたかも覚えてないし…」

「何か心に残っていることはないかい？」

「思い出せない…」

「でも何かとても悲しかった気がする…。」

「悲しかった？」

「うん、ひとりぼっちで寂しい気持ち…」



「じゃ…その悲しみを克服する計画を立ててみようか？」

「どんな？」

「そ…だなあ…先ず、男がいいかい？女がいいかい？」

「どっちでもいいけど…」

「じゃあ仮に男としておこうか、
どんな世界がいい？」

「あんまり酷いのはいやだなあ…でもあんまり恵まれ過ぎでも…」

「克服のし甲斐がないかい？」

「…うん、ねえ神様…覚えていないんだけど
僕は今までどんな体験をしてきたの？」

「今の君としてかい？」



「今の君としては数百回ぐらいだよ。」

「そんなに？」

「その前までならもう数万回は向こうの世界で過ごしていたんだよ。」

「どうしてそんなに何度も行ったり来たりしているの？」

「楽しいからさ。」



「楽しい？」

「そうだよ。その楽しさを何度も体験したから…だから全てを度忘れるんだよ。今も前のことは覚えていないだろうか？」

「…うん」

「それはね、次にまた向こうの世界行く準備ができた証なんだよ。」

「何だかメンドウだなあ…」

「行かずに済む方法はないの？」

「君がまだ行きたくなければそれでもいいよ。」

「どちらを選ぶのも君の意思だ。」

「ただ…」

「ただ？」



「準備ができていのに居残るのは逆に辛いよ。」

「ここでは何の実体験もできないからね…。」

「でもこうやって覚えていないことを教えてもらってるし…」

「君がそうしたいなら今はそれもいいだろう。
他に尋ねたいことはあるかい？」

「さっき言ってた前の僕って？」

「今の君とは別の意識を持っていた君だよ。」

それは以前も今も私の「部」だ。

…いや、わたしたち、と言った方が判りやすいかな？」

「神様も僕も「緒」ってこと？」



「雨を覚えているかい？」

水蒸気が大気中に溜まって雲となり、

更に重さが増えると雨となって地表に降るだろうか？」

「…うん」

「その雨の粒のひとつひとつが向こうの世界での「生」だよ。」

地表に着いた瞬間に他の粒と混ざり水となって流れて海に辿り、

また水蒸気となって空に登る…。」

「…何かとても儂い感じがするなあ…」

「そのひとつひとつの実体験は掛け替えのないものだよ。
ひとつとして同じものはないし…」

「そうだけど…」

「腑に落ちないかい？」

「どうして「うちでは皆がひとつになるのに
各々の体験を「緒」に感じることができないの？」

「それじゃあ記憶の追従はできてよ

実際にその場で作り出す楽しみがないじゃない？」

「楽しみなの？」

「そうだよ。さっきも言ったけど、自分自身で実体験できるんだよ。

嬉しい気持ちを実際に体験できる楽しみ

悲しい気持ちを実際に体験できる楽しみ

楽しい気持ちを実際に体験できる楽しみ

切ない気持ちを実際に体験できる楽しみ

悔しい気持ちを実際に体験できる楽しみ

辛い気持ちを実際に体験できる楽しみ

そして

幸せを実際に体験できる楽しみ…。」



「ここでは味わえないそれらを実体験するために
もうひとつの世界でさまざまな姿形となって
新しい環境で生まれるんだよ。」

「何だか…疲れちゃうね…」

「疲れたと思ったら休めばいいさ。
気の済むまで…」



そしてまた実際に体験したくなって
向こうの世界に行ってみたくなる時が来るから…
なあに…すぐだよ。」

「もうひとつの世界で…」

「何だいっ」

「もうひとつの世界では好きなことはわかりしてて大丈夫なの？」

「大丈夫とは？」

「罰せられたりしない？」

「わたしたちは誰も罰したりしないよ。全ては君の選んだことだ。でもね、

心を傷つけようとする者には…

人が許さないだろうね…。」















「僕…もうひとつの世界に行ってみるよ。」